The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜受贈図書紹介＞近松全集刊行会編『近松全集』全十七巻 ： 刊行完結と新資料発見
Author(s)	正木, ゆみ
Citation	語文. 1997, 67, p. 44-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68907
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

受贈図書紹介

近松全集刊行会編『近松全集』全十七巻

——刊行完結と新資料発見——

正木ゆみ

本全集は昭和六十年十一月に刊行が開始され、平成六年四月を以て完結を見た。第一～十四巻の浄瑠璃編、第十五、十六巻の歌舞伎編（歌舞伎編は影印編、翻刻編の二分冊）において近松作品約一五〇作を網羅する。既に高く評価されているところであるが、徹底した諸本調査による厳密な本文校訂、曲節、表記等の研究のための写真版の掲載など、画期的な編集が試みられ、まさに『近松全集』の決定版としてゆるぎない。その編集方針に、名著『浄瑠璃史論考』（中央公論社）の諸論文にうかがえるような、近松作品を演劇としてとらえる立場から、浄瑠璃の曲節や演出研究に力を注がれ、可能な限り当時の舞台の姿に肉薄されようとした、祐田善雄氏の御遺志が鮮やかに反映されていることも周知のごとくである。と同時に、制約の多い芸能の中において、その希有な個性を、浄瑠璃の美しい、重層的な言葉や、魅力溢れる登場人物たちが織りなす人間ドラマの中に発揮せんとした、近松の文学性を読み解くテキストとしても、本全集は完璧な形を備えている。すなわち、演劇、文学両面から、豊饒な近松の世界に迫り得る最善の全集といえよう。

第十七巻の資料編（影印編、解説編の二分冊）では、近松伝記関連資料、絵入本挿絵などが網羅され、やはり画期的な編集方針がうかがえる。本巻には、和田修氏が平成四年に発見、紹介されて（鳥越文蔵氏編『歌舞伎の狂言』八木書店　に解題、翻刻所収）、学会の注目を浴びた「金子日記」から、近松（本名「信盛」で記される）が登場する記事を抄出した「「金子日記」抄」が収められる。本日記によって、元禄期、歌舞伎作者としても活躍した近松の作者生活や狂言作りの実態、また知られざる近松の歌舞伎作品名が判明した。第一級の近松伝記資料といえる。また、同巻には、信多先生が、近松のもっとも初期の作品であることを立証された（同巻月報一七「近松作品の発掘——『てんぐのだいり』を中心に」、園田学園女子大学近松研究所編『近松研究の今日』所収「近松初期作品をめぐって」参照）延宝期の宇治加賀掾の語り物『てんぐのだいり』を収める。延宝期は近松の存疑作時代であるが、その時代の作品群を近松作品と確定する基準を得ることは困難をきわめる。それだけに、元禄期の近松作品『十二段』と関連を持つという内部徴証から、『てんぐのだいり』を、従来、近松確定作の第一作とされてきた天和三年の『世継曽我』に先立つ作と位置づけられた意義は大きい。前述の「金子日記」と併せ、従来課題とされてきた浄瑠璃、歌舞伎における近松著作考の問題に一石を投じる資料といえよう。以上のような、近松研究にとって貴重な資料や作品が、全集刊行中に発見、またはその意義を再発見され、最終巻に収められたことは、まさに僥倖というべきであろう。なお、同巻の「刊行を終えるにあたって」に、本全集の刊行の経緯が記されているので、参照されたい。

さて、本全集刊行完結後、再刊を待望する多くの声に応えて、平成七年四月に第二刷の刊行が開始され、先頃（平成八年八月）完結を見たが、初刷刊行完結後、および第二刷刊行中に、歌舞伎作者近松に関わる、大変貴重な新資料二種が信多先生によって発見された。一点は、元禄十七年正月京都早雲座上演歌舞伎『娘長者羽子板絵合』の役割番付である。本番付には、「狂言作者近松門左衛門」と

記され、知られざる近松の歌舞伎作品が判明した。従来、歌舞伎作者近松の名を記す原番付は、『けいせい壬生大念仏』（本全集第十六巻翻刻版口絵参照）の役割番付のみが知られていたが、新たに一点が加えられたわけである。今一点は、本年（平成八年）六月の近世文学会において、先の番付と併せて先生が紹介され、「金子日記」発見以来の興奮をもたらした新資料、近松歌舞伎の屈指の名作『けいせい仏の原』（元禄十二年正月京都万太夫座）の絵入狂言本の上本の下巻（刊本一冊）である。本作については、本全集第十五巻所収の、全体の筋書きを簡略に記した並本（刊本一冊）、及び前半の筋書きを詳細に記した上本（写本一冊）が知られていたが、上本の下巻は長い間所蔵が不明であり、その出現が待望されていたものである。その上本下巻が発見されたことにより、名作『けいせい仏の原』の全貌が明らかになると共に、並本の記述には見られない、やつしや傾城事で名を馳せた名優坂田藤十郎の滑稽な演技や、悪心を翻す異色な敵役を演じた藤川武左衛門を中心とした、劇的な展開を見せる後半の詳細な筋が判明した。

以上二点の新資料が、近松が狂言作者として活躍した元禄上方歌舞伎の解明の進展を促す重要なものであることは言を俟たない。これら新資料は、全集第二刷第十五巻、および初刷購読者のために刊行された『近松全集補遺』に収められた。さらに特記すべきは、その『近松全集補遺』の巻頭に掲げられた口絵の近松真蹟「鷺図画賛」についてである。本画賛も、長い間所蔵不明であり、全集初刷第十七巻には、大阪朝日新聞社版『近松全集』の口絵が使用された。ところが、肥田晧三氏のご教示により、本画賛が、大阪平野町の湯木美術館に所蔵されていることが、近時判明し、『近松全集補遺』および第二刷第十七巻に掲載されたのである。その解説に記されるように、「巣林頑翁七十二歳書」という近松の署名を鮮明に読み取ることができ、自らを「頑翁」と韜晦する近松の最晩年の人となりをうかがい知ることができる好資料である。

このように、全集初刷刊行完結後から、第二刷刊行が終盤にさしかかった時期にかけて、近松の新資料が続々と発見されたことも、やはり僥倖というべきであり、本全集刊行の準備段階から関わられ、長年にわたって刊行会の事務局をつとめられて、編纂にご尽力なさった信多先生のお喜びはひとしおのことと拝察される。第二刷の刊行も完結した現在、新資料も含めた本全集の成果を踏まえて、近松研究の新たな局面が切り拓かれていくことを、本全集より多大な恩恵を蒙る一人として心より祈りつつ、拙い紹介文を終えたいと思う。

（一九九四年四月初刷全十七巻完結、一九九六年六月補遺編刊、岩波書店）

――本学大学院博士後期課程――